

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 282



1995 MAY

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

会費値上げと会員拡大のお願い

日本ヒマラヤ協会は、1967年に設立以来登山、踏査、探検・研究などをとおして、ヒマラヤの各地域に多くのメンバーを派遣し、得られた情報を公表することで「ヒマラヤ」を身近なものにするために果たした貢献は誇り得るものであり、会員各位の御努力に深く敬意を表するものであります。

身近になったヒマラヤではありますが、事故対策はもとより時代の経過と共に新たな問題も起きて来ました。その大きなものに「環境問題」があります。地球規模で自然保護が叫ばれる中において、登山隊の物資やゴミ処理方法も随分と変わってきました。

我国で唯一のヒマラヤ専門団体として、ヒマラヤにおける活動の発展につとめてきた本会の業績は高く評価され、高所登山・環境問題・プラブーツなどの分野では、各団体から連携を求められる機会が多くなり、一定の役割を果たして参りました。

本会がこのような役割を期待され、それに答えることが可能になったのは、1979年11月以降「事務局専従」体制を維持してきたことにあると云っても過言ではありません。

専従者の費用につきましては、その大部分を外部資金の導入などの努力によって賄なわれてきました。しかし、昨今の社会情勢から外部資金の導入も厳しくなったのが現実です。

このような中で昨年7月合同理事会・評議員会が開催され事務局体制（事務所の閉鎖・専従員の廃止等）について真剣に検討された結果、「日本ヒマラヤ登山界の中で、主体性を持った活動を続けることによって、結果的に公益性を実現していく組織として存続」することが決定され、新年からは専従員1名とすることとなりました。

ここに事務所を維持し、専従員を置き所期の目的を達成するために、1980年以来15年間据置いて参りました会費を「8,000円（1997年から10,000円）」に改訂させていただくことになりましたので、会員各位の御理解をお願いする次第です。

また、現状の会員数では専従員の費用を賄うことはできません。新しい会員の獲得とサマー・キャンプ参加者の増大などにつきまして会員一人一人の皆様の御協力をお願い致します。

表紙写真

ギャジ・カン（7,038m）の頂上で360度のパノラマを満喫していると、マルシャンディ河の向こうにマナスル（8,163m）主峰と東峰が赤沢の猫の耳のように眺められた。

（田辺 治）

ヒマラヤ No.282

- | | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. PEOPLE | ターレ・モハンマド |
| 2. パキスタン開放地域と規制地域のトレッキング | |
| 6. ヒマラヤにおけるアメリカ人の運動 | - テイクイン、テイクアウトの先を行く - |
| 11. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉 | |
| 13. キンヤン・キッシュ登山計画 | |
| 15. もう一つの輝き - 遠征の思い出から - | 谷田川 武 |
| 20. 中国登山15年小史（2） | 山森 欣一 |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

(社)日本山岳協会が毎年開催している恒例の海外登山技術研究会は今年で33回を数え、2月18日～19日に八王子大学セミナーハウスで開催された。

この研究会は日本体育協会の競技力向上事業補助金交付を得て実施している事業で、これまで主にヒマラヤの高所登山を対象として、ヒマラヤの気象・地形・氷河・タクティクス、高所医学、高峰登山家の体力科学とトレーニング、自然保護と環境問題など、その時代、その時代に即した幅広いテーマで報告及び研究が行われてきた。

そしてこの研究会の内容は、特別事業報告書として毎年まとめられ、貴重な資料として供されてきた。然し、残念ながら予算の関係でその報告書が今年から出されなくなった。淋しい限りである。

手許の古い海登研の報告書を繙いてみると、日本の高峰登山史を物語るかのような貴重な資料がまとめられている。

繙いて気づいた事は、最近このような精根を込めた奥の深い研究が見られなくなった事である。

それは回を追って海登研のプログラムにも表わされており、内容のマンネリ化につながっている。

ヒマラヤ登山の大象化とともにあらゆる情報が容易に入手出来るようになった現在では、それで用が足りるのかも知れない。毎年のようにヒマラヤを目指す人にとって、「狭く深く」よりは「浅く広く」の方が必要なであろう。然し、浅い知識ではものを語れないし、書けない。自分なりに研究考察したつもりの事が、既に古い海登研の報告書に発表されたりしていると恥しくなる。ヒマラヤの奥深さは、山の高みだけにあらず、このようなどこにもその奥深さを感じる。

海登研はどう在るべきか。マンネリ化を打破するのに外国から第一線で活躍している登山家をゲスト・スピーカーとして招請してはどうか。などの意見もあって、この海登研に外国人のゲストが参加するようになって久しい。然し、予算の裏づけがなく、個人的な招請に依る参加の為、その顔ぶれは登山者よりは行政側の担当役人の方が多い。



それはそれで受入れ側の情報を生の声で聞けるのだから素晴らしいのだが、限られた会議日程の中では余り時間が取れず、折角のチャンスも十分にいかしきれないのが現状である。もっとも毎回夜の懇親会では遅くまで盛り上がり、この場での「行く側」と「受入れ側」のコミュニケーションが一番貴重なものになっている。

前置きが長くなってしまったが、第33回海登研ではK2初登頂40周年を記念して、K2をメイン・テーマに取り上げ、ゲストとしてパキスタンから政府観光省登山局長のターレ・モハンマド氏、パキスタン山岳会副会長でパキスタン人初のK2登頂者でもあるアシュラフ・アマン氏、登山家から昨秋パキスタン北部地区評議会議員に選出されたナズィール・サビール氏、それに現地の旅行エージェントに勤め、登山隊やトレッキング隊のガイドをしているモハンマド・サルワール氏の4人が参加された。尚この4名の日本招請は日山協海外常任委員の広島三朗氏のご尽力に依ることをここで特筆しておきたい。

今回はさらに中国から中国登山協会の曾曙生常務副主席、通訳の趙建軍氏。カザフスタンからはサガルマータ南西壁登攀者のカズベク・ブァリエフ氏、韓国からは張炳虎氏と嚴弘吉氏の2名が参加され国際色豊かに賑わった。

ターレ・モハンマド氏は大学教授から観光省の登山局長に移られてきた方で、今回が初来日となった。

パキスタンの現地情報のセッションでは、カラ

ASHRAF AMAN



コラムの素晴らしさと自国の山の概要について語られた後、K2の登山史を述べられたが、せっかく詳しく調べてきて頂いたのに前日のセッションと重複するため、途中で割愛して頂いた。最後にカラコルムの山々の環境保護について語られ、1990年に国際ウィルダネス協会が行なった「フリーK2」のビデオを是非、この海登研でも上映して

パキスタン

「開放地域」と「規制地域」のトレッキング

パキスタンの特徴は、まず6,000m未満なら登頂を目的にしる峠を越えるにしる、すべてトレッキングの範疇に入っている点である。その上でトレッキング地域を「開放地域」と「規制地域」の2つに分類している。

「開放地域」を歩く場合はイスラマバードやラワルピンディーの町を歩くのと同じで、全く自由でありトレッキング許可を取る必要もない。そのためトレッカー自身で奥地に入ったポーターを雇って歩けばよいわけで、力のあるパーティならエージェントの力を借りなくても可能である。しかし開放地域といっても氷河をつけた5,000mを越える峠もあり、特に日本人にとって馴染みの深い「カラコルム探検」のピアホー、ヒスパー氷河も開放地域に含まれており何の規制もない。また開放地域内なら6,000m未満の山の登山も、イスラマバードの町を歩くのと同じ範疇に入るのだから、ちょっと工夫すれば結構楽しい登山ができる。特に事前に調査すれば6,000m未満の未登峰の登山も楽しめるだろう。実際に1989年には神奈川県高体連の第4回海外登山研修で、26人のメンバーで

MOHAMMAD SARWAR



参会者に見て頂きたい、と要望された。

前日の懇談会の席上では、「今回の招請の御礼に今夏パキスタンの6,000m～7,000m峰に出かけたい、と希望される方がいたら、この場で許可を与えますので、どんどん申し出て下さい。」とサービスをアピールされていた。

(ターレ・モハンマド)

10峰の5,000m峰に登頂し、そのうち3峰が初登頂であった。

「規制地域」は主に国境付近で、トレッキングでそのまま国境を越えられるような地域である。バルトロ氷河は上流で中国領に越えられるし、チトラールを流れるヤルフーン川の上流部ボロゴルは、簡単にアフガニスタンのワハーン回廊に、またフンザ北部ゴジャールのチャプールサン渓谷もワハーンや中国のダグドゥームバシ・パミールへ抜けられる。さらにカラコルム東部ではシアチェン氷河の領有をめぐる、インドと対立しているが、その付近もトレッキングの規制地域に指定されている。

この地域のトレッキングを行なう場合は、政府公認のエージェントを通じて申請し、公認のガイドが同行する。建前上は申請後24時間以内に許可が出ることになっているが、数日間の余裕があることが望ましい。次に規制地域のトレッキング・コースをあげておくので、それ以外の地域が開放地域になっていると理解すべきである。

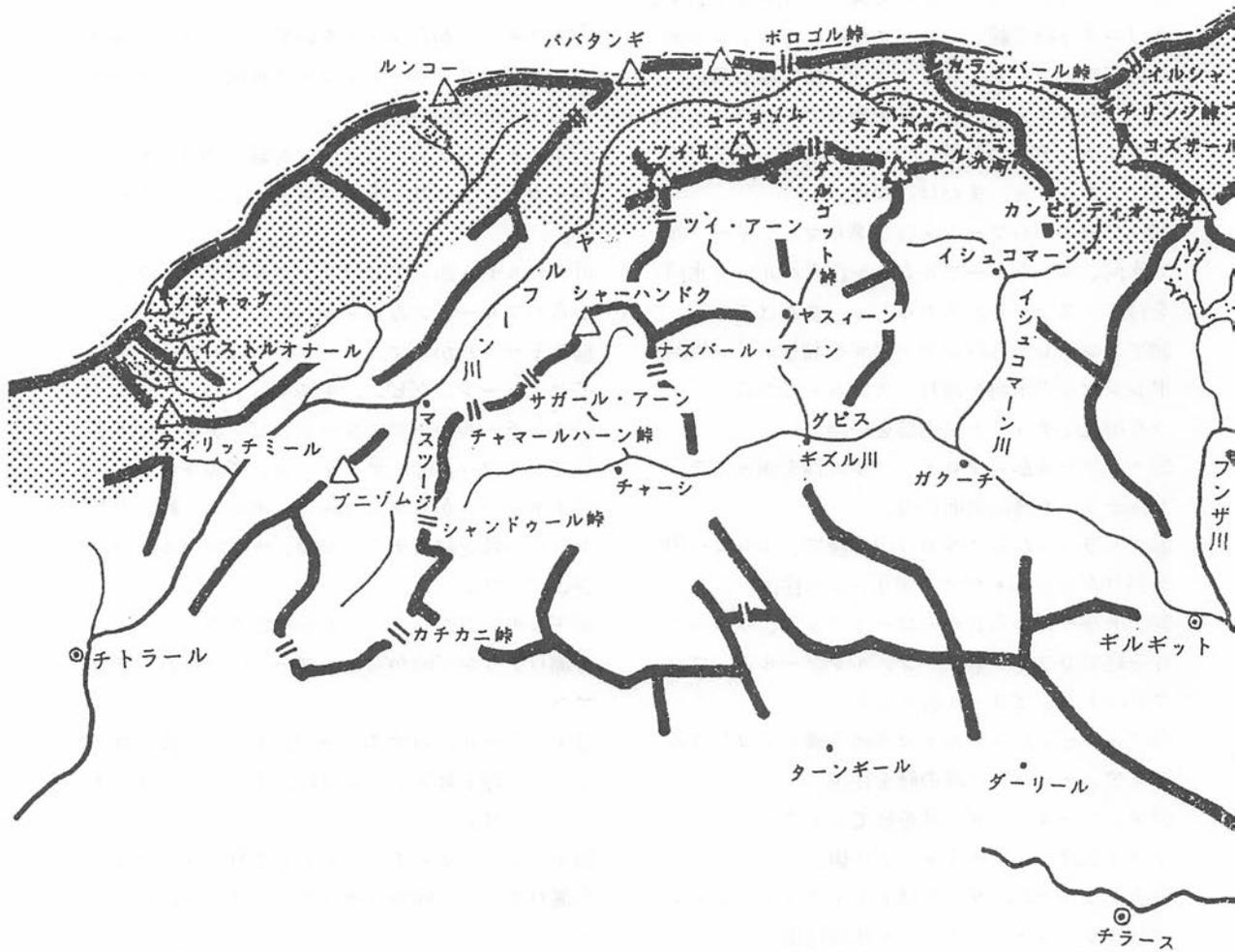
規制地域のトレッキング・ルート

- ⑩ハプールからフーシェ谷を溯りトリニティ氷河、トリニティ峰の麓、ビーネ氷河、バルトロ氷河を経てアスコレ、スカルドゥ。またはこの逆。
- ⑪ハプールからフーシェ谷を溯りゴンドコロ氷河、ビアルチェディ峰の麓、バルトロ氷河を経てアスレ、スカルドゥ。またはこの逆。
- ⑫ハプールからフーシェ谷を溯りマッシュャブルム氷河、マッシュャブルム峠を越えバルトロ氷河を経てアスコレ、スカルドゥ。またはこの逆。
- ⑬アスコレからパンマー氷河を溯りチリン氷河、ドレンマング氷河を巡り、スカム・ラからシム・ラを越えてチョクトイ山群を一周。
- ⑭チトラールからマロイ、バルム谷を溯ってティリッチミール峰南東面往復。
- ⑮チトラールからアルカリ川を経て、ルトコー川を溯りガラムチャシマ、プリシュト往復。
- ⑯チトラールからビルモゴラシュト、ウタック峠を経てカフィリスターン／ルンブール谷。ブンブレット谷、ピリール谷を巡る。
- ⑰アスコレからバルトロ氷河を溯ってコンコルディア、チョゴリザ峰の麓を往復。
- ⑱チトラールからザニ峠を経てシャグラム、ショゴールを経てバブーキャンプ往復。
- ⑲チトラールからザニを経てシャグラム、ショゴールラシュト、アトラック氷河往復。

- ⑳チトラールからブンブレット、ショーグラム、ドクシャル、フラグラムシャル、ソールラゴリ。
- ㉑ギルギットからソストを経てラーミンジ、ルプガルを経てクッキージェラブ氷河、ヤシクークからソストへ戻る。
- ㉒ギルギットからヤスィーンを経てツイ・アーンからガゼン、ルコット、マスツージ、チトラールへ。
- ㉓スカルドゥからアリマリックを経てパルクッタからハプルー、スカルドゥへ。
- ㉔チトラールからマスツージ、ツイ・アーンを経てヤスィーン、グピス、ギルギット。
- ㉕チトラールからマスツージ、ビンディコットを経てダルコット峠、ヤスィーン、ギルギット。
- ㉖チトラールからマスツージ、ボロゴル峠、カランバル峠を経てチリンジ峠、チャプールサン溪谷、フンザ。
- ㉗ギルギットからイミットを経てカランバル川を溯りチリンジ峠からチャプールサン溪谷、フンザへ
- ㉘チトラールからマスツージ、ボロゴル峠、カランバル峠を経てチリンジ峠、チャプールサン溪谷、フンザ。
- ㉙ギルギットからイミットを経てカランバル川を溯りチリンジ峠からチャプールサン溪谷、フンザへ

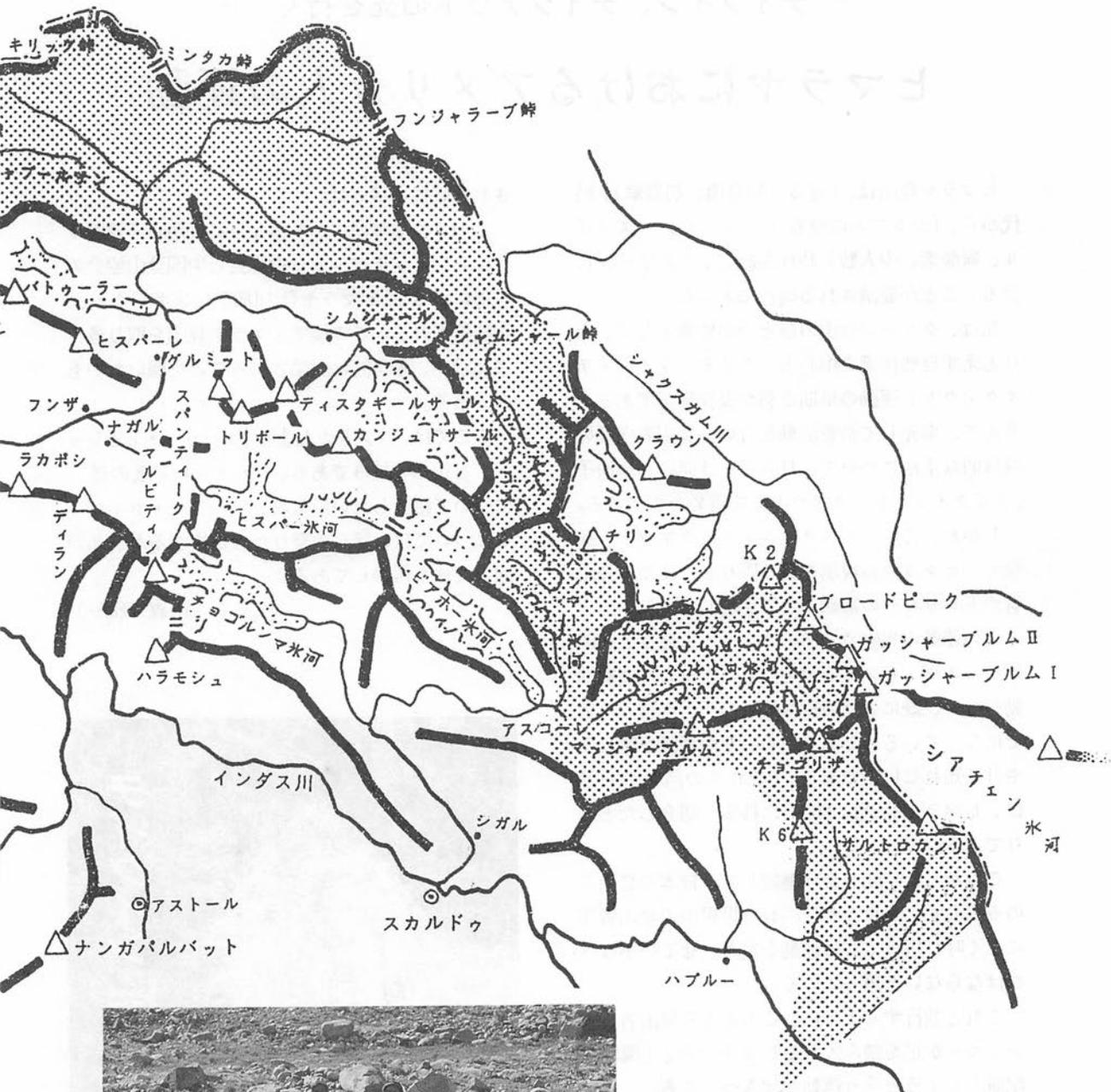


▲ギルギット郊外のインダス河に架かる橋(谷田川武)



パキスタンのトレッキング

「開放地域」と「規制地域」



▲ファラクサールのBCにて (谷田川武)

ヒマラヤにおけるアメリカ人の運動

ヒマラヤ登山は、[登る（初登頂、初登攀）]時代から、[シンプルに登る（アルパイン・スタイル、無酸素、少人数）]時代を経て、[クリーンに登る]ことが要請される時代に入った。

私は、クリーン登山のひとつの要素として、とりあえず自然保護を中心とした[テイクイン・テイクアウト]運動の早期定着が優先事項であると考へて、率先して啓蒙活動を行い、登山者向けの具体的な手法について、HAT-J発行の小冊子[テイクイン、テイクアウト]を纏めたのである。

しかし、この[テイクイン・テイクアウト]運動も、ヒマラヤの現場を見る限りまだまだ、登山者やトレッカーの常識として定着していない。

この運動の先駆者であるアメリカ人達は、1990年からエヴェレスト周辺を中心に継続した清掃活動を行い、既に大便の持ち帰りの可否を試みるまでになっているのであるから、その意識を差たや計り知れないのである。（これらの活動の一端は、ヒマラヤ259号、268号に抄訳し紹介したとおりである。）

これからは時間をかけ継続して、日本の登山者のみならず、ヒマラヤを訪れる世界中の登山者等に広く呼び掛けてこの運動を定着させていかなければならないと思っている。

これと並行するように、このところ登山者、トレッカーが足を踏み入れるヒマラヤの、[環境に配慮]しようと言う運動が起きつつある。

その一つは、[ゴミによる汚染]と[環境住民の経済]を機能的に結び付け、解決することによって結果的に[環境に配慮]することを試みるものである。

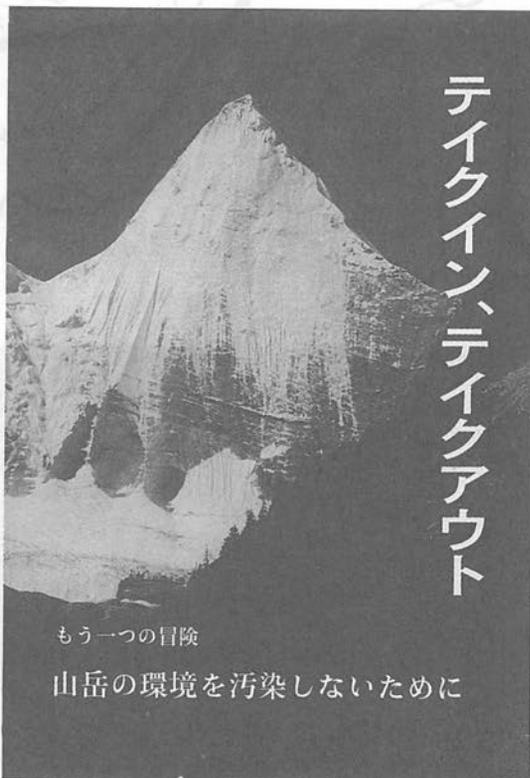
また、科学の急激な進歩によって、これまでは登山者等にしか利用価値のなかったヒマラヤの僻地にも[天然資源等]の開発の手が伸びようとしており、これらの経済行為と登山活動とが、競合せず両立できるための方策などについても討論

される時代となった。

このような時期に、本年5月21日から一週間ラサにおいて、チベット登山協会と中国登山協会の主催による、[ヒマラヤ登山国際シンポジウム]が開催される。この場でヒマラヤ登山を取り巻く諸問題が、多角的に討論されることを願いたいものである。

ここでは、アメリカ人達の[ソーラー・トイレット]と新しい試みである、[チベット/紙の道]について紹介したい。なお、ソーラー・トイレットについては、話しの繋りから重複するが一部前回の文章も再録してある。

(文責：山森 欣一)



▲HAT-J発行のテイクイン、テイクアウト教本

紙の道／チベット —1995—

今でこそ世界中に普及している紙が初めてこの世に登場したのは、今から約二千年前の中国だった。中国の小さな町で誕生した製紙技術は、「紙の道」と呼ばれる長大なルートを通して世界各地に広まっていった。中国から日本へ渡り、それからチベット、トルキスタンなどの東方諸国を経てヨーロッパを通り、そして最終的にアメリカに至るこのルートは、各地の文化と文化をとりもつ活気溢れる道でもあった。

周知の通り、紙は文化・宗教両面においてなくてはならない物である。また商業、科学、政治などあらゆる分野で重要な役割を果たしている。

チベット文化史の中でも、紙は千二百年もの長い間必要不可欠の存在であり続けてきた。現地の植物から取った繊維を原料として作られ、主に、この国特有の精神世界を築き上げている仏教の經典に使用された。しかし、近年のチベットにおける深刻な時代逆行化と共に製紙産業は後退の一端をたどり、今では消滅の危機にさらされている。

「紙の道／チベット」プロジェクトは、チベットの製紙文化を救い、復興させることを目標としている。シェガールの職業訓練センターでは、近い将来に手作業による製紙の技術講座が開講されるが、国内のみならず海外の職人達の参加も予定されている。センターの母体はウッドランド・マ

ウンテン協会とチベット開発基金である。両団体とも、同様の計画を他にも実現させるための別個の独立基金設立を目標としている。

ウッドランド・マウンテン協会はチョモランマ自然保護区（南部チベット及びチョモランマ北面）の指定に貢献した団体である。毎年多くの登山家や巡礼者、冒険家、旅行者がこの地区を訪れているが、その繊細かつ独特の文化と自然に深い感動を覚えない者はひとりとしていない。

1990年のエヴェレスト環境保護遠征隊は、旅行者や登山者が残すゴミ屑を利用した製紙方法を現地の人々に実演紹介した。シンプルな技術なので人々はすぐに興味を持ち、特にロンブク寺院の僧尼達はその方法を熱心に受け入れ、彼らには、技術訓練用の基礎的な道具が贈られた。

「紙の道／チベット」プロジェクトの中には、地方の職人達に紙の再生法を教える施設設置の計画もあり、自然保護とチベット製紙手工業の伝統継承の両面において、良い効果が期待されている。製紙職人が自然保護という視点に立てば、わずかな樹木や植物よりもゴミの再利用や麦藁その他の農業副作物の利用を採った方がよいと考えるだろう。

ゴミを使った製紙方法は、2つの問題解決に結びつく。ひとつは、資源が限られているという問



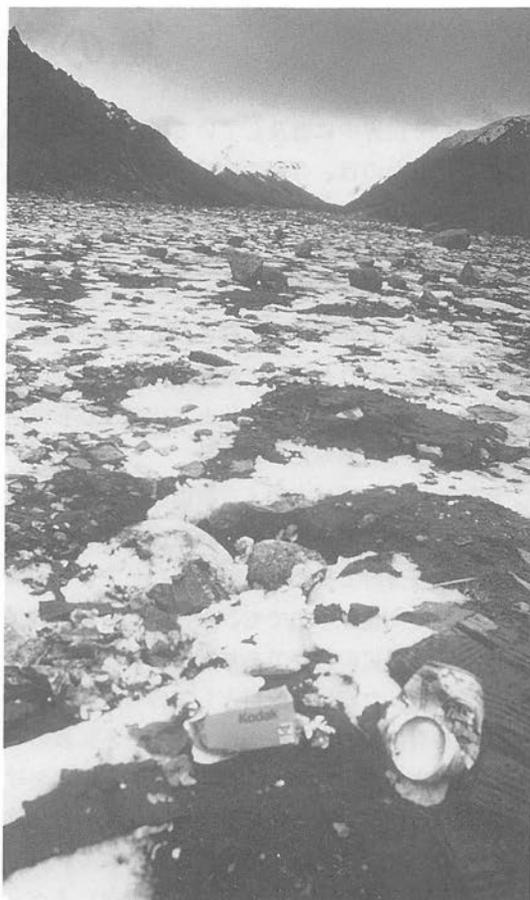
題。もうひとつは環境汚染を招くゴミ問題である。このプロジェクトにより、再生可能な紙屑の回収システムが確立し、そして紙屑の環境汚染を喰い止める事ができるだろう。

シェガルー・センターの指導には、世界各地の製紙手工業のエキスパート達があたる事になっている。ベーシック・コースは常設、その上にアドヴァンス・コースも設置される。ワークショップ・マネージャーに選ばれた者は、センターのマネジメントについて講習を受け、更にネパールとアメリカに招待されて現地の伝統技術を学ぶ事ができる。マーケティング・トレーニングについては逐次学習する方式になっている。

「紙の道/チベット」プロジェクトは、生態学と伝統のかかわり合いについての新たな考え方を生み出していこう。ワークショップで作られた紙は、そのセンターの読み書きの授業に使用される事になっているが、いずれは各寺院や、地方の村々にまで行き渡らせるのが目標である。ワークショップ自体は、将来的には現地の人々による運営組織に変わる可能性を持っている。製紙の小工場になって旅行者の消費する紙の供給やさらには国外への供給を実現させる事が期待される。

(訳:菅原 愛里)

なお、このプロジェクトに協力したい方は、下記宛US\$小切手を送って下さい。又、100%綿のTシャツもありますので必要な方はサイズ(M、L、XL)を記入し、US\$20-を送って下さい。



CROSSING OVER CONSORTIUM

3724 Mckinley Street, N.W.

Washington, DC 20015-1520

ヒマラヤをソーラー・トイレットで美しく

■ はじめに

辺境の山岳地域に住む人々は数多くの差し迫った問題を抱えているが、とり分け早急に解決しなければならないのが、排泄物処理の問題である。山岳地帯の住民そして旅行者の増加が事態を一層深刻にしつつあるが、大方の辺境地には下水設備が無く、人々はおもたせられざるにせざるにその場で用を済ませてしまう。下水設備のある所もあるが、それは非常に初歩的なもので川に直

接落として流す、といった具合だ。美観を損なうウンヌンは殊に旅行者の間で熱心に論じられているが、それよりもまず真剣に認識しなければならないのは、そういう状況が住民達の健康を奪いかねない、という事である。ペルーとインドではコレラが大規模に流行している。それら発展途上国での幼児の死因の主たるものは下痢で、大抵の場合粗末な下水設備が元凶となっている。

■ ソーラー・トイレットとは

1993年、私達はシンプルかつ安価で、しかも効率の良いソーラー・トイレット（発動機不要）のテストに没頭した。このトイレットこそ、山が排泄物で汚染されるのを防ぐ良策だと確信したからだ。ニューメキシコはタオス在住の優れた建築家ミカエル・レイノルズがソーラー・トイレット使用に成果を上げていたのを耳にしたのがこのプランのきっかけだった。ボブ・マッコネルは、去年10月ラスベガスで開催されたU I A A（国際山岳連盟）の会議で、ヒマラヤ登山学校（HMI）の校長アジット・ダット大佐と話す機会を得た。HMIはインドのダージリンに本拠地があり、毎年1,400人ももの生徒を迎え入れる。生徒達はトレーニング期間の内10日間をHMIのベース・キャンプで過ごす。1日につき1人の生徒の排泄物が1ポンドだとすると、HMIのベース・キャンプは1年間に約7トンの排泄物を処理しなければならないことになる。ダット大佐は、ソーラー・トイレットの効果を試してみたい、についてはインドに招待したいとの話を私達に持ち掛けてきた。ミカエル氏は、2台のソーラー・トイレットを寄贈してくれるとともに、HMIのベース・キャンプまで同行してくれる事になった。エア・インディアはトイレットの空輸代を無料にしてくれた上に、私達一行のデリー往復運賃をディスカウントしてくれた。また、インド国内航空は、デリー～バグドグラ（ダージリンに最も近い空港）間の空輸代を持ってくれる事になった。デリーでの宿泊場所はインド登山財団が提供してくれるという話になった。重量やサイズの問題で最後の最後まで迷った末、トイレットは1台だけ持っていくことになった。

■ インドでソーラー・トイレットの設置

今回のインド行きの目的は以下の通り。

- ミカエル氏がタオスで有効な成果を上げたソーラー・トイレット・システムをダージリンのHMIに提供する。
- HMIのベース・キャンプに設置し、高所・モンスーン等悪条件の元、どれだけの成果を上げられるのかテストする。
- ソーラー・トイレットに必要な材料がインド国内

でも入手できるかどうかを確かめる。

1993年9月6日、アメリカ出発。デリーに着いた私達は組み立て部品の入った大カートンボックス2個がまだ到着していない事を知り、愕然とした。ミカエル氏はただちに現地入手の部品で作れそうな代替品を設計しなければならなくなった。2カートンは結局インドに送られてきたが、インド税関から引き出す事はできなかった。今もデリー空港に置かれているはずである。1週間以内で新型の設計図と2つのプロットタイプが完成した。使用する全ての資材は現地購入。ひと組につき約100ドルという費用となった。ダージリンからシッキムまでは車で移動し、シッキムから3日のトレッキングでHMIのベース・キャンプ（標高14,600フィート）に到着した。既にあったトイレはヒマラヤの大方のベース・キャンプで見受けられるタイプで、縦穴を掘りその周囲を粗い麻布で囲ってプライバシーを守れるようにしてあった。私達はまず設置場所を決定し、到着した日の午後から早速1台目の組立てにとりかかった。連日の雨天の中、作業を続けたおかげで4日目には2台とも設置終了。トイレは、ソーラー・パワーによって排泄物をカラカラに乾燥させると同時に殺菌するように排泄物は最終的に無菌の粉状になるので、安心かつ簡単に処理することができる。目下、HMIからの試用報告待ちである。

ソーラー・トイレットがうまく稼働してくれるようであれば、さらに数台「ベース・キャンプ型」のモデルを作る予定で、その際組立て技術面での改善も行う事になっている。ミカエル氏の手によるマニュアル（構造、組立て、メンテナンスに関する詳しい解説書）も近々発行される。可能な限り、ユーザーが理解し易いものになるだろう。出版・配布の経費を十分賄えるだけの資金が準備できれば、EEPとしては、発展途上国の人々に無料配布したいと考えている。私達が帰国した1週間後、アメリカン・アルパインクラブから5,000ドルの寄付があった。ダージリンやベース・キャンプでの作業の様態を記録したビデオも製作。1本15ドルでご希望の方にお送りします。

EEPによるソーラー・トイレット・プロジェクトの資本金はわずか1,395ドルだったが、私達

の期待に応えられるトイレットが完成し、そしてマニュアルを出版・作成するだけの十分な資金が得られた結果、ヒマラヤのベース・キャンプやトレッキング・ルートが抱えていた排泄物処理の問題解決に大きな力を貸すことができるようになった。

■ 1994年の報告

ソーラー・トイレット・プロジェクトは、現在も会議事項の中心に置かれています。6台のトイレットが数ヶ所に設置され（インドに2台、ネパールに2台、コロラド・スプリングス南部・カスター郡にある大農場に1台）、様々なテストが行われています。特に、カスター郡では1997年に屋外トイレ設置が禁止される予定なので、テストの結果は重要な意味を含んでいました。現在そこでは多くの人々が屋外トイレを使用しており、その代わりになり得るソーラー・トイレットへの関心は高まっています。空軍学校の士官候補生グループが目下、技術面についての研究を進めており、12月にレポートを発表する予定です。

■ 謝辞

このプロジェクトを進め続けてきた過去6年間をふり返ってみると、私達（ひとつの小さなボランティアグループ）は、自ら成しとげてきた数多くの成果に誇りを覚えます。

121,000ドル——これは、6年間で集めた支援金です。（多くの環境保護グループがおのおのの実行委員長に1年間で支払う金額と比べれば）決して十分とは言えない基金ですが、それでも環境保護遠征隊をチベットへ2隊、研究プロジェクト・チーム数隊を、インドやネパールへ送りました。そして、今では山岳環境問題に関しての発言力も大きくなっています。

8月からこの方ずっと、私達の委員会のメンバー達は、様々な雑誌——「オードゥボン」「クライミング」「ナショナル・ジオグラフィック（世界版）」「ロック・アンド・アイス」「スポーツ・イラストレイティッド」「サミット」「U.S. ニュース・アンド・ワールド・レポート」——からコメントや引用を求められ続けています。あなたもE

EPのメンバーとして、これらの成果を誇らしく思ったださることを願います。

この会報は年に1回の発行で、26ヶ国1,300人の方々の手元に届けられます。この会報代が、私達の主な収入源になっており、様々なプロジェクトに当てられます。

■ 1994年は良き年だった

1994年サガルマータ・環境保護遠征隊は、隊員5人中4人が登頂に成功という快挙を成し遂げました。その上、環境保護の面から見ても、登山の成果と同じ位注目すべき成果を得たのです。使用済みの酸素ボンベやゴミの回収に際し、“バイ・バック（buy back）”プログラムが実行されました。高所ポーター達がサウス・コルからボンベを降ろしたら、ボンベ1本につき彼らに6ドル支払うという方式です。下部キャンプのゴミの回収についてはそれよりも少ない額が支払われました。

高所キャンプからのゴミ下ろしは、荷上げの帰りに行われたので、ポーター達の生命を脅かすような無理にはならず、正に画期的なプログラムでした。現地と一緒にした他の数隊も、このプログラムに加わり、おかげで250本の酸素ボンベをサウス・コルから下ろす事ができました。

私達の隊は結局5,000ポンド（約2.3トン）を越えるゴミを山から回収し、ナムチェ・バザールまでヤクを使って運びました。リサイクルできそうなものはカトマンズへ空輸し、それ以外はナムチェの焼却炉で燃やしました。

今回の遠征隊で証明できたのは、「小規模の隊でも、サガルマータを登頂し、さらに環境面での素晴らしい業績を残す事が可能である」という事です。この遠征隊のプログラムに習って今後の遠征が行われていけば、ヒマラヤはもっともっと美しい地になるでしょう。（訳：菅原 愛里）

なお、この清掃プロジェクトへの協力は下記のとおり行って下さい。（送金は小切手で）

1. サポートメンバー US\$10
 2. ソーラー・トイレットのビデオ US\$15
- EVEREST ENVIRONMENTAL PROJECT
3730 WIND DANCE LANE, COLORADO
SPRING CO 80906 U.S.A

地域ニュース

《インド》

トラ保護で印中調印ワシントン条約

インドと中国は、絶滅の危機にひんした動植物の商取引に関するワシントン条約で付表4に指定されたトラの保護に関する相互議定書で合意に達し、3月2日、北京で調印した。

インド北部から中部に生息するベンガルトラは1940年の4万頭から、93年の3,750頭に激減した。その陰に、トラの骨を薬原料にしたり、皮を珍重する中国、台湾、香港の需要を受けたインド密猟業者の動きがあった。密猟・密輸ルートは、インドと地続きのシッキム州、ブータン、ミャンマーの陸路と、カルカッタ、ニューデリーの空路があるとされ、いずれのルートでも昨年、大規模密輸業者の摘発が続いている。

議定書は八項目。①違法捕獲と密輸業者の共同捜査②情報交換③政府機関による捕獲と人工飼育と繁殖——などからなっている。

トピックス

北極海徒歩横断の挑戦相次ぐ

ラインホルト・メスナー氏（50）が無補給の北極海徒歩横断を目指して3月7日、北シベリアのシュミダ島（ロシア）を出発した。

今後の計画では、弟のフーベルト氏（医師）と2人で北極点を經由し、カナダ領エルズミア島のコロンビア岬まで2,000キロを3ヶ月かけて踏破する予定。

メスナー氏は1990年にドイツの山仲間と2人で4,200キロの南極大陸横断を成し遂げたときと同じように、犬ヅリも使わず、歩きに徹する。極点を経ての北極海横断には、1968-69年にイギリスのハーバード隊が成功しているが、物資の空輸など外部からの援助を受けずに挑戦するのは初めて。

全食糧・装備を積んだ2台の特製ソリを引きながらスキーで零下50度まで達する厳寒の氷上を行

く。北極の流氷は移動と崩壊を繰り返し、進路を見つけるのが難しい。万一、氷が割れて海面が広がった場合、ソリがカヌーの役割を果たすように設計されていると云う。

南極、北極、そして第3の極地と云われるエヴェレストの「三極制覇」を夢みる冒険家は少なくない。メスナー氏が今回、北極点に到達するとノルウェーのアーリング・カッゲ氏、日本の中村進氏に次いで3人目の三極制覇者となる。カッゲ氏も中村氏も北極横断はしていない。

*

3月14日のAFP時事電によると、北シベリアのシュミダ島を出発した7日、零下42度の氷上でテントを設営したとき、ソリが氷の海に閉じ込められ、その回収中にクマが2人を襲った。

フーベルト氏は海に落ちて靴を失い、凍傷で歩けなくなり、メスナー氏とともに8日、ヘリで救出された。

日本人2人も北極へ

今季、日本人の冒険家2人も北極へ挑む。その1人は大場満郎さん（42）で史上初の単独、無補給の北極海徒歩横断を目指し、既に現地入りしている。（既に敗退した。）

もう一人は自転車世界周りを彷徨するような水平思考と8,000m峰登山もする垂直思考を合わせた冒険家、河野兵市さん（36）が、スキーによる北磁極到達に挑む。

韓国隊も北極へ

世界最高峰、エヴェレスト（8,848m）の冬期登頂やチベット側からネパール側へのトラバースなどで話題をまいた許永浩（Heo Young Ho）氏の一行も北極を目指す。

これは許氏の三極点横断計画の一環として行なわれるもので、4名の隊員が北シベリア側から北極海を横断してカナダ側のエルズミア島を目指す。

計画では3月5日にソウルを出発した後、3月13日～14日頃、ロシア領北シベリアを出発して5月13日頃北極点到達を目指す。カナダ領エルズミア島には7月13日～14日頃に到着の予定。

尚、一行はカナダ側から極点に食糧及び融氷対策としてのシーカヤックや交換衣類など装備の一部を航空機で投棄デポをする予定。

メンバーは以下の4名とサポート隊員2名。

隊長 Heo Young Ho (40)、隊員 Kim Bu m Taek (31)、Kim Sung Hwan (34)、Hong Yoon Ki (28)、マネージャー Jang Ki Chan (41)、Ms, Oh Chi Bong (29)

予算は約3,500万円

インフォメーション

4月の東京集会

4月の東京集会は下記の通り開催いたします。

日時 4月24日(月)19時～

会場 HAJルーム

事務所移転募金協力者ご芳名

5口～鳥井修一、江尻健二、金子文雄、4口～国沢鎮雄、1口～斉藤喜美雄

3月14日現在の累計額は、1,963,500円

(敬称略)

1995年春のネパール・ヒマラヤ登山隊

山名	標高	国名	隊長名	隊員数	ルート
サガルマータ	8,848m	ネパール	Iman Gurung (20時間登頂計画)	1	南東稜
"	"	アメリカ	Bob Hoffman	7	"
"	"	ニュージーランド	Robert E. Hall (Clean Up Exp.)	14	"
カンチェンジュンガ	8,586m	アルゼンチン	Alberto G. Raynie	8	南面
"	"	イタリア	Simone Moro	5	南西壁から 西峰へ縦走
ヤルン・カン	8,505m				
マカルー	8,463m	オーストラリア	David Victor	8	北西稜
"	"	スペイン	Juanito Urtaga	7	"
"	"	インドネシア	Nirfan Rifky	7	"
ダウラギリ I 峰	8,167m	ロシア	Dmitri Votchkov	10	北東稜
"	"	スイス	Worbert Joss	10	"
マナスル	8,163m	ドイツ	Holger Kloss	11	北面
アンナプルナ I 峰	8,091m	スロベニア	Anton Skarja	9	北西面
アンナプルナ IV 峰	7,525m	オーストラリア	Gary T. Hayes	7	北面
"	"	オーストリア	Adi Weissensteiner	21	北西稜
ランタン・リルン	7,234m	スペイン	Jose J.Q. Auerencia	7	南東稜
プモ・リ	7,161m	デンマーク	Rene Andersen	4	南東稜
"	"	オーストラリア	Dereh Francis Murphy	6	南稜
アマ・ダブラム	6,812m	ノルウェイ	Arne Naess	9	南西稜
"	"	オランダ	Robert Steenmeijer	4	北西稜
"	"	アメリカ	Donald D. McIntyro	6	南西稜
"	"	ドイツ	Christof Schellhammer	6	"
"	"	アメリカ	Charles S. Woolums	5	北西稜
ドゥランナン・リ	6,801m	ノルウェイ	Arns Ness	13+7	東稜
シーター・チュチュラ	6,611m	日本山岳会	オカワ クニハル	3	北稜
タウチェ	6,051m	イギリス	Stephen Sustad	4	北東バットレス

キンヤン・キッシュ登山計画

1995年

1、隊の名称

日本ヒマラヤ協会キンヤン・キッシュ登山
隊1995
英文名 HAJ KINYANG KISH EXPEDI-
TION 1995 (HKE 95)

2、派遣母体

日本ヒマラヤ協会

3、目標の山

キンヤン・キッシュ (7,852m)

4、目的

北稜より登頂

5、登山期間

1995年6月～8月

6、隊の構成

隊 長 飛田 和夫
隊 員 3名
リエゾン・オフィサー 1名
コ ッ ク 1名

7、推進の組織

HAJキンヤン・キッシュ登山隊実行委員会
会 長 稲田 定重 (HAJ理事長)
副 会 長 山森 欣一 (同専務理事)
実行委員長 飛田 和夫 (登山隊隊長)
事務局長 尾形 好雄 (同常務理事)
実行委員 八木原 聡明 (同常務理事)
中川 裕 (同常務理事)
登山隊隊員

8、隊の事務局 (留守本部も兼ねる)

日本ヒマラヤ協会
〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501
☎ 03-3988-8474 FAX 03-3988-8502

9、日程

6月12日 日本出発
19日 パスー
25日 BC

28日 登山期間45日間

8月11日

12日 BC撤収

19日 パスー

21日 イスラマバード

27日 イスラマバード出発

日本帰国

10、現地連絡先

SILK ROAD TOUR SERVICE

Hous No.1, St.22, F-7/2,

(P.O.Box 2253)

Islamabad, PAKISTAN

☎ Islamabad 824556

11、予算

収 入 3,200,000円

個人負担金 800,000円×4名=3,200,000

支 出 3,200,000円

国内内訳		国外内訳	
渡航費	720,000	滞在費	200,000
登山料	300,000	現地購入費	100,000
装備費	150,000	輸送費(人件費含)	1,200,000
食糧費	150,000	予備費	100,000
輸送費	150,000		
医療費	50,000		
事務費	30,000		
予備費	50,000		
合 計	1,600,000	合 計	1,600,000

12、隊員

1) 生年月日/年令 2) 住所 3) 勤務先 4) HAJ以外の所属山岳団体 5) 海外登山経験
隊 長 飛田 和夫 (Kazuo TOBITA)

1) 1946年1月 (49歳)

2) 〒343 埼玉県越谷市

3) (株)T・H・I

4) 無所属

- 5) 1976年 カラコルム偵察
- 1978年 トリスル (7,120m) 登頂
- 1981年 ヤルン・カン (8,505m) 登頂
- 1983年 ヌン (7,135m) 隊長
- 1984年 玉龍雪山 (5,596m) 隊長
- 1985年 K2 (8,611m) 隊長
- 1986年 ゴーキョ・ピーク
- 1986年 ギャラペリ (7,151m) 隊長
- 1987年 ゲニ (6,204m) 隊長
- 1987~88年 冬期K2 (バルトロ氷河) 偵察隊長
- 1988年 ゲニ (6,204m) 隊長 初登頂
- 1988年 ガッシャーブルムII峰 (8,035m) 隊長
- 1989年 マッキンリー捜索隊
- 1994年 ムスターグ・アタ(7,546m)隊長 登頂

隊員 田村 正勝 (Masakatsu TAMURA)

- 1) 1942年 4月 (53歳)
- 2) 〒166 東京都杉並区
- 3) 中野企画
- 4) 黒稜山岳会
- 5) 1991年 ヌン (7,135m) 登頂
- 1992年 ムスターグ・アタ (7,546m)
- 1992年 クラウン (7,295m)

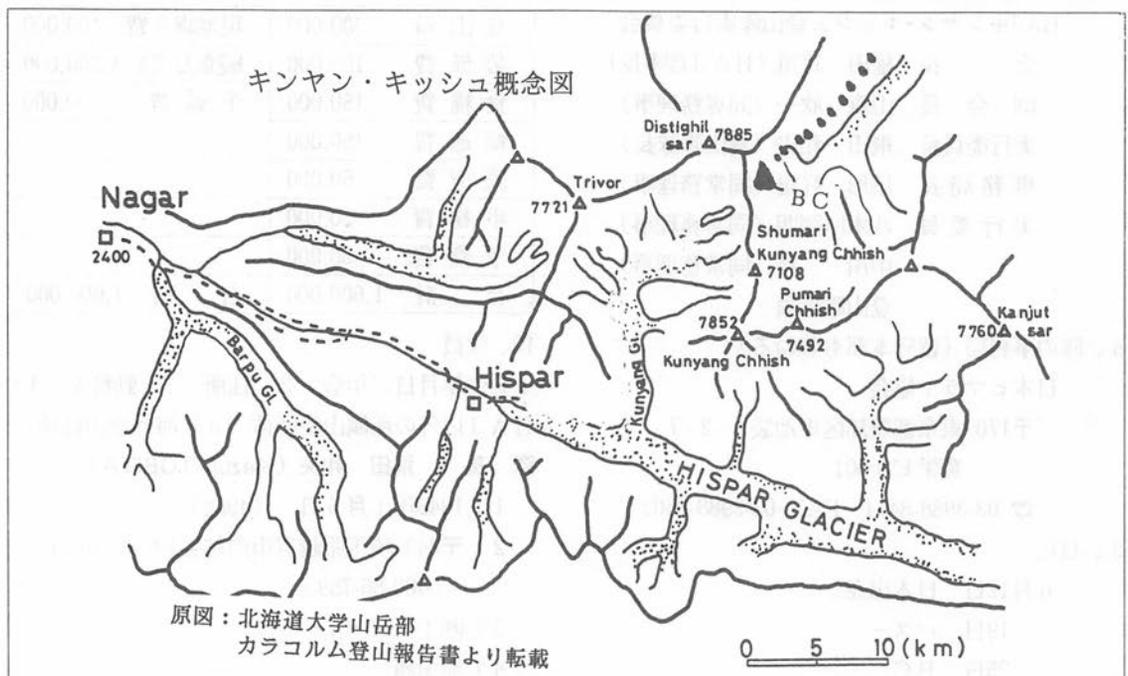
- 1993年 ブロード・ピーク (8,047m)登頂
- 1994年 ムスターグ・アタ (7,546m)登頂

隊員 大谷日佐夫 (Hisao OTANI)

- 1) 1969年 8月 (25歳)
- 2) 〒236 神奈川県横浜市
- 3) 日榮建設工業(株)
- 4) 横浜山岳会
- 5) 1992年 夏 ヨーロッパ アルプス
モンブラン (4,807m) 登頂

隊員 寺沢 玲子 (Reiko TERASAWA)
(BCマネージャー)

- 1) 1951年 8月 (43歳)
- 2) 〒343 埼玉県越谷市
- 3) 主婦
- 4) わらじの仲間OG
- 5) 1980年 アイランド・ピーク (6,189m)
- 1986年 キンナウル・カイラス (6,473m) 隊長
- 1987年 ヌン (7,135m)
- 1988年 ゲニ (6,204m) 初登頂
- 1988年 ガッシャーブルムII峰 (8,035m)
- 1992年 サラスワティ(6,940m)隊長 初登頂
- 1994年 玉虚峰 (5,933m) 隊長 登頂



もう一つの輝き

—遠征の思い出から—

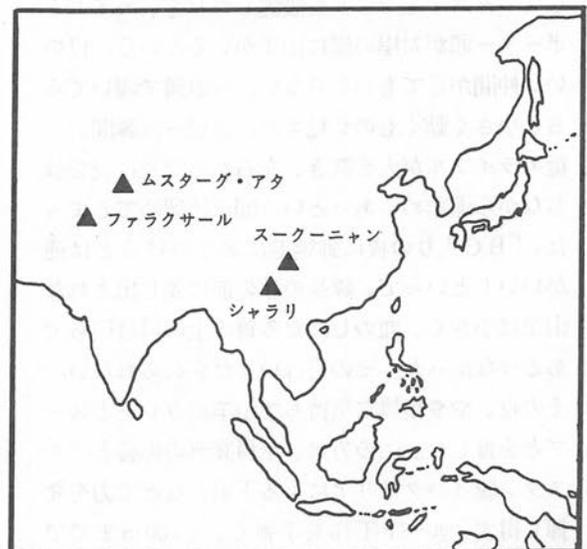
谷田川 武

◇私が山に憧れ、山を歩くようになってから幾久しい。年によっては年間百日以上山に入っていることもあった。長年山を歩いてきた者にとって、ヒマラヤは憧景の地であり、いつかはその頂のひとつに踏み跡を残してみたい地である。しかしながら、現在でこそヒマラヤは1年に日本隊だけでも何十と入る地となっているが、私が学生であった頃（15年程）でもまだ遠い地であり、また、長期休暇の取れる夏期がヒマラヤではモンスーン（雨期）であることも、ヒマラヤ遠征への思いを思いだけに留めさせていた。

◇そんな私が初めて隊を組んでヒマラヤへ出掛けることになったのはひょんなことからであった。ある年の暮れ、剣岳から下山して富山の街で飲んでいる際、仲間のふたりが遠征をめぐる口論となり、来年は行くぞと相互に断言し約束してしまったのである。その横で“行くぞといったって何処へ行くんだい”と思っていた私に、その後海外旅行とトレッキングの経験が何度かあり、東京に居て情報を集めやすいということから、隊長役が廻ってくることとなったのである。そして、1988年に出掛けたのがパキスタン北部スワット地方の主峰ファラクサル（5,918m）であった。この山を選んだのは、パキスタンでは6,000m以下の山は地元警察への届出だけで登れること、モンスーンの影響の少ない地域で、その地域での主峰であることなどからであった。古くからの山仲間5人での遠征であった。

パキスタンを訪れた我々を待っていたのは強烈なカルチャーショックであった。首都ラワルピンディを出発した車はばんばんと飛ばし、クラクションを鳴らし続けながらかなりのスピードの車を追

抜いていく。そんな我々の車の横を更に猛スピードで車が抜いていく。時には対向車とぶつかりそうになる。そうした道を人々が悠然と横切り、道端に平気な顔をして座り込んでいる。ガイドに聞くと、人を轢殺したとしても、その場のペイ（支払い）だけで済んでしまうケースが多いそうだ。我々の車はとうとう牛と衝突してしまう。イスラム圏とあって、途中の街では女性の姿を殆ど見ることができず、隊の紅一点はじろじろと珍し気に見詰められる。登山口の村は谷から岩山が切り立っているために耕地が少なく、冬は交通も遮断されるため、貧しさと生活の厳しさから麻薬中毒者が多く、我々が入る直前にも殺人事件があったとのことであった。小学校の教室に隊荷を預け、夕食後、ホテル（牛小屋の上に小部屋が3つあるだけ）へと向かったが、両側をライフルを持ったガイドとガードマンに守られ、トイレ（その辺の草むら



▼ファラクサル (4,800m付近から見る頂上とルート)



です)に行くのもガード付きであった。就寝前、ホテルの人からいざという時は自分達で守れとピストルを手渡される。皆の顔が青ざめる。兎に角寝ようとのことで、1畳もない簡易ベッドに横になると背中が痒い。どうやらシラミかダニがいるらしい。このシラミかダニのため、ひとりはこの後高熱を出すこととなる。2日のアプローチでBC(ベースキャンプ)を設置した夕方、ガイドとポーター頭が対岸の崖に山羊がいるという。目のいい仲間が見てもわからない。双眼鏡で覗いてみると小さく動くものが見えた。と思った瞬間、2挺のライフルが火を吹き、左右から交互に銃を放ちながら追詰め、あっという間に仕留めてしまった。「BC入りの夜に御馳走にありつけるとは運がいい」といって、隊長の私の前に差し出された山羊は小さく、血のしたたる首の上の目は丸らであどけなかった。その目はいまだ忘れられない。その夜、やや複雑な気持ちで山羊のカレーとスープとを食した。山の方は、全員高所の影響とパキスタン腹(バクテリアによる下痢)などで力を発揮し得ず、ルート工作も手強く、5,100mまでで終わった。しかし、C2から見上げた朝夕赤く染

まったヒマラヤ巒の頂稜の美しさは深く目に焼き、現在でも鮮やかに浮かび上がってくる。

◇この遠征に味を占め、翌89年出掛けたのが日本ヒマラヤ協会のシャラリ遠征であった。シャラリは中国南部四川省の南西部に聳える6032mの未踏峰で、その地域自体が外国人が初めて入る地域であった。省登山協会が遠くの峠より撮った写真がたった一枚しかない山で、その麓まで辿り着けるかどうか不明な山であった。そうした冒険的要因に憧れ、隊員に立候補した。そして、全国から同じような考えで集まった素敵な仲間9人でまあ行ける所までいこうよとの考えで出発した。恰





度天安門事件のあった年で、北京までの飛行機はがらがらであった。四川の省都成都から4日の走行、更に幾つもの峠を越えての5日の歩行とで麓に達し、BCを建設することができた。アプローチでは、松茸の産地で食べ放題に食べたこと（食べ過ぎると、その香りの強さの故か、翌日後頭部が少し痛くなる）、天幕を張った集落では、初めて見る外国人である我々に100人~200人もの輪ができ、夕食の支度をし、食する所をじっと見詰められたことなど、めったに経験できぬ体験をした。そして、至る所を埋めつくした花畑が忘れられぬものとなった。殊に、BC手前の沖古という場所は、緑色の清流がゆったりと弧を描き、その周囲一面を黄色の花が絨毯のように敷詰め、馬が草を食み、傍らにはラマ寺の廃墟が建ち、正にこの世の桃源郷であった。シャラリは神々しいまでに美しく、人を寄せつけぬかのように聳え立っていた。前衛のがらがらの岩場にルート工作をし、内院に入ってから主氷河を詰め、西稜に取付いた。しかし、その稜線が大小のスレートを積上げたような状態で、両側も1,000m程切落ちていて、5,500mまでのルート工作で登頂はあきらめられた。C

2を撤収する日、全員で稜上の小ピークを初登頂した。やるだけやった、皆清々しい顔だ。下山の前日、少し離れたチベット人の集落を訪れた。着



▼二姑娘山の登攀（5,100m付近）



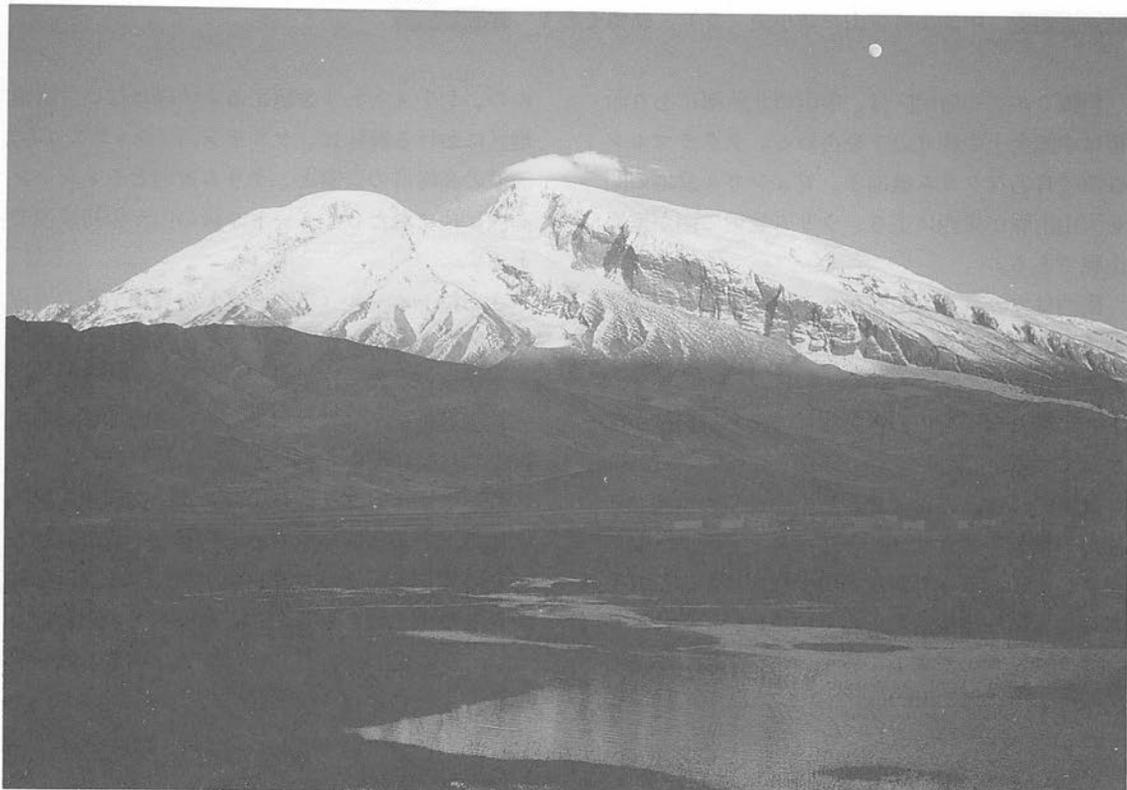
飾った娘達が愛らしく踊りを見せてくれた。我々もその輪に加わった。良く飲み、良く歌い、良く笑った、そして忘れ得ぬ数多くの風景と人々とに出会った遠征であった。

◇次に出掛けたのは92年H A Jの雪宝頂遠征であった。雪宝頂は前回と同じく中国四川省の北部の山で、シャラリの時のメンバーふたりが参加し、隊員が集まらないとのことで、友人ひとりを誘って参加した。

中国を訪れた我々を待っていたのは豪雨と土砂崩れによる彷徨であった。目的地雪宝頂への道が遮断され、復旧の見込みもないということから、急速、名峰ミヤコンコ北部の5,000～6,000m峰を目指すこととなり、成都を西へと出発した。しかし、我々を2日目に待っていたのは土砂崩れによる峠道の遮断であった。消沈して成都に戻った我々に入ってきたのは遮断されていたスークーニャンへの道が何とか開通したという情報だった。相当激しい雨が続けているため、どうなるかわからないが、他に行く所もなく、翌朝成都を出発した。スークーニャンは雪宝頂と同じく省北部の名峰で、四姑娘（四人娘）の名の如く、4つのピークから

なる。主峰四姑娘（6,250m）は難峰で、2～4峰の何れか（でき得れば2ピーク）を狙おうというのである。何度も足止め、落石に遭いながらも、何とか登山口の村まで着くことができた。村の後には天を突くような段々畑が並び、一步登った尾根には百花が咲き乱れていた。特に真白な絨球のように見えた薄雪草の花は圧巻であった。その花畑の先には美しい湖があった。山の方は、2回に分けて大姑娘（5,025m、頂まで踏跡がしっかりとし、数多く登られている）に全員登頂し、2姑娘（5,276m）にも取付き、5,100mまでルート工作をしたが、雨でアタックはできなかった。ヒマラヤ遠征も高齢化が進んでいるが、7名の内、私が一番年若い遠征であった。

◇続けて93年に遠征したのがH A Jのムスターグ・アタ（7,546m）である。アタは中国西部新疆ウイグル自治区の西端に聳える名峰で、シルクロードに近いため、古くから様々な本に登場する。アプローチが短く、ルート工作もあまり必要ないため、短期間で登頂できる可能性のある7,500m峰である。長年の憧れの地であり、7,500m峰を登頂できるかもしれないということで参加した。



ムスターグ・アタとは現地語で「氷河の父」という意味で、麓より仰ぎ見るその姿は真白く、気高く神々しかった。登山口の村が3,600m、我々が目指した主峰（南峰）が7,546m、その標高差4,000m弱、伊豆の海岸から見上げた富士山を思い浮かべていただければ良いと思う。近くには名峰コンゲール（7,719m）も堂々たる姿で聳え、その風景は正に大陸的であり、乾燥地帯のために樹木というものがなく、茶色の砂漠の上に白き山々、その上に深い青空とその色彩は何とも形容しがたいものであった。そうした風景の中をラクダが隊荷を運んでいく。C1より上部はだらだらとした巾広い雪面で、寒さと体力とに戦いであったが、高度順化もほぼ順調に進み、A隊として5名、その翌日にB隊として6名、11名全員が登頂に成功した。私はB隊として登頂したが、午後より悪天候と積雪のために全員が登頂したのが19時半となり、吹雪と夕暮れの暗さで下山中に標識が見つからなくなり、7,100m地点でピバーク（簡易テントを被っただけの夜営）をすることとなった。この夜の寒さ（6,300mのC2で朝の平均がマイナス20度）のため、隊長は足に中度の凍傷を負い、他2名も軽

度の凍傷を負うこととなった。その翌日、くたくたとなってC3よりBCまで下った。父の看病で腰と膝を傷めていた私にとっては辛い登頂であった。登山基地となったカシュガルはシルクロードの要衝で、多民族が集い、下山後、あちこちを見学し、憧れであった地楽しい思い出を数多く作ることができた。路地裏で出会った子供達の顔に民族と歴史の十字路といことを深く感じ取ることができた。辛い大きな糧を得ることができた遠征であった。

◇遠征の楽しみはその時だけで終わるものではない。思い出ということもあるが、何より日本各地に一生付き合える素晴らしい山仲間を持つということがある。ちょこちょこ出会っては、旨い酒に様々な話に花を咲かせている。現在、私の所には、正月を前にして、青森、会津、金沢、長野、京都と遠征仲間が送ってくれた名酒が並んでいる。それらの酒をちょこちょこ飲みながら、その仲間のことを思い出すが至上の楽しみのひとつである。そして、いつになるかわからないが、次の遠征へと思いを馳せることがもうひとつの至上の楽しみである。

I-1 ボゴダ (博格達・Bogda)

*山脈：天山山脈。東端の最高峰。

*位置：ウルムチ (654m) の東約60km。

[43° 48' N, 88° 21' E]

*アプローチ：名勝池である [天池 (1,942m)] を經由する。天池まではウルムチから車で4時間程。I峰主峰北東稜の場合天池を船で渡り (10~20分程度) キャラバンは馬で2日。BCは北面グラチマイロ氷河の3,500~3,600m。

*一般ルートの所要日数：I峰主峰北東稜の場合、標準的には2週間程度。(BC~登頂)

*山の概念：I峰主峰5,445m。I峰中央峰5,287m。I峰南西峰5,213m。I峰南峰5,180m。II峰5,362m。
I峰とII峰の間に5,288mと5,149m峰がある。

*通常の登山期間：7月~8月の夏期。

*山名：蒙古語でボゴド・オーラと呼ばれ、神の靈験を意味する。

*小史：1948年7月にI峰主峰の北東稜・東稜をシプトンとティルマンが試登し、東稜上に

ある4,793メートル峰 (当時は5,050m峰となっている) に登頂した。

*参考文献：山岳第七十七年 [日本山岳会・1982年12月刊] (地名と地図と標高について=児玉茂 天山山脈ボゴダ峰周辺の自然について=名越昭男)

登山の概要

■ I峰主峰 (5,445m)

1980年

9月 開放第一陣として (西) ドイツのシュムックら8名が入山。北面に入ったが3日間続いた悪天で30cmの積雪となり、ポーターが引き返した。9月20日4,650mまで達したが、腰までの雪のため断念した。

1981年

5月~6月 北東稜 京都山岳会

6月9日宮川清明ら6名初登頂。

10日藤林ら4名登頂。10日白水ミツ子がBC~C1刊のクレバスに転落死亡。

[隊長・中井巖(54) 遠藤京子(43) 宮川清



明(40) 中島睦美(35) 能勢博(28) 藤林雅(41) 大野栄二(33) 山田昭一(31) 三島明美(30) 金子聖三郎(22) 大西敏夫(52) 白水ミツ子(30) 撮影・梶原達夫(38) 新谷暁生(34)] 他

[中国・天山山脈 処女峰ボゴダ (1981年12月刊)]

8月～9月 北西稜 上智大学アルペンフェライン オーバーハングした氷壁に阻まれて5,050mで登頂を断念した。

[隊長・細野淳美(47) 大前明生(26) 三浦力(43) 伊藤堯祥(44) 三上隆達(40) 岡島信子(35) 三橋いく代(37) 磯貝浩(41) 森芳一(23) 大谷亮(21) 松山岳之(22) 野村真人(21) 魚住吉博(23)]

8月～9月 北東稜 日本山岳会学生部
8月28日上栗ら3名登頂。29日増島ら2名登頂。

[隊長・鹿野勝彦(39) 梶正彦(34) 丸尾祐治(35) 名越昭男(36) 児玉茂(31) 森幸順(29) 織田沢美知子(49) 増島達夫(29) 磯野剛太(27) 智片健二(24) 秋元孝子(32) 入月繁(27) 上栗優一(24) 相馬勉(21) 内田信(21)]

[日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊1981年の報告]

1982年

6月～7月 北東稜 伊東市・動霧山岳会
アイス・フォールの状態が悪く、悪天も重なり、4,600mまで到達して断念した。

[ボゴダをめざして (昭和58年5月刊)]

1983年

7月～8月 南面 日本山岳会関西支部
チゴ氷河4,900mまで。

[隊長・上原泰行ら8人]

1986年

7月～8月 北東稜 福岡教育大学
8月17日小山田ら2名登頂。18日にも後藤ら3名が登頂。

[隊長・中島正一(50) 野中捷雄(42) 長久修(40) 小田切直人(41) 藤田克巳(40) 小山田秀明(32) 後藤哲二(37) 野上真佐

夫(27) 吉武春雄(38) 吉塚憲博(29) 城石俊憲(30) 濱崎二郎(19) 才藤哲也(30) 長岡経国(28) 碓浩一(41) 田中耕司(28)
[86博格達峰登山報告書(1987年3月刊)]

1987年8月 イギリスのサンディ・アランとカナダのイーヴァン・プライスが8月13日4,600mのキャンプから登頂した。西洋人としては初めてと報告。北東稜と思われる。(AAJ30)

■ I 峰中央峰 (5,287m)

1984年

7月～8月 西峰から 日本山岳会東海支部
8月10日西井ら10名が西峰から縦走し初登頂。南峰を経て下山。

[隊長・大野紀和(40) 西井正義(37) 北川みはる(35) 岡芳正(30) 藤田元弘(23) 中沼秀之(21) 吉田和正(21) 興津豊(20) 村松聖子(21) 中山孝司(21) 田中一成 片岡正弘(21) 顧問・鈴木重彦(51)]

[山岳第八十年 (1985年12月刊)]

■ I 峰南西峰 (5,213m)

1981年

7月～8月 北稜 天山会
8月7日瀬山ら3名初登頂。8日作見ら3名登頂。10日内田ら3名登頂。

[隊長・内田良平(45) 富山宣英(31) 田村賢三(27) 萩原孝一(24) 瀬山高史(23) 作見力(34) 北川雅昭(36) 川田修三(24) 小林研(22) 住吉仙也(54) 竹田千代喜(26) 報道・西山暉大(44)]

[天山の詩 (昭和57年4月刊)]

7月～8月 南稜 国鉄山岳連盟
ビバークしてアタックしたものの悪天到来で5,050mで時間切れのため登頂断念。

[隊長・加藤孜(55) 竹内克圭(44) 清水洋子(42) 佐藤昭平(40) 雨宮勝三(36) 内原克巳(32) 藤瀬信一(31) 小野里忠(31) 宮村春男(27) 石山真作(27) 清水満(26) 横山登(25) 荒木輝夫(25) 東谷州博(24) 西口隆之(21) 長田浩(59)]

[天山山脈 博格達峰(昭和57年4月刊)]

1984年

7月～8月 南稜 日本山岳会東海支部
8月10日西井ら10名登頂し、中央峰へ縦走。
[メンバー、参考文献共に前掲]

■ I 峰南稜 (5,180m)

1984年

7月～8月 南稜 日本山岳会東海支部
当初中央峰への登路として入山したが、仙
台隊に優先権あり4,760mまでで断念。中央
峰から北西尾根経由で8月12日10名登頂。

[メンバー、参考文献共に前掲]

7月～8月 南稜 仙台一高山の会

8月10日後藤ら6名初登頂。

[隊長・高橋幹郎(53) 佐浦英志(48) 柴崎
徹(42) 門間好道(39) 谷口育(29) 志鎌
良一(28) 千田雅之(22) 保坂正美(20)
細谷尚子(37)]

[天山博格達峰登山報告書 (1985年1月刊)]

■ II 峰 (5,362m)

1981年

9月 北稜&東稜 日本山岳会学生部
偵察を兼ねて試登を行う。北稜4,100mま
で。東稜5,000mまで。

[メンバー、参考文献は前掲]

1982年

7月～8月 南稜 日本山岳会学生部
8月18日磯野ら2名初登頂。20日山本ら4
名登頂。21日川澄ら4名登頂。23日磯野ら4
名登頂。

[隊長・磯野剛太(28) 板垣望(41) 名越礼
子(43) 浅川とみ子(32) 関山温子(27)
川澄隆明(25) 陰山潔(26) 山本宗彦(22)
平形竜太郎(23) 奥田尚志 松本洋介(23)
相馬勉(22) 和田雄一 高村真司(22) 小
林一也(21)]

[日本山岳会学生部ボゴダ登山隊1982年の報
告 (昭和57年12月刊)]

■ その他周辺の登山記録

1981年

7月～8月 もんたにゅう会
4,203m峰に登頂。

[天山への夢遙か]

1982年

7月～8月 立正高校
剣石II (4,304m) に登頂。

7月～8月 中国/長野県山岳協会
4,000m峰数座に登頂。

[天山友誼 昭和58年8月刊]

1985年

8月 福島天山登山隊
遠峰 (4,613m) の約4,500mまで。

[天山への路 (昭和60年11月刊)]

ボゴダ I 峰主峰登頂者

氏名	年令	登頂年月日	ルート	備考
宮川 清明	40	1981.8.9	北東稜	初登頂
遠藤 京子	43	"	"	"
三島 明美	30	"	"	"
大野 栄二	34	"	"	"
梶原 達夫	38	"	"	"
新谷 暁生	34	"	"	"
藤林 雅	41	8.10	"	"
中島 睦美	36	"	"	"
能勢 博	28	"	"	"
金子聖三郎	22	"	"	"
山田 昭一	31	"	"	"
上栗 優一	24	1981.8.28	"	"
相馬 勉	21	"	"	"
智片 健二	24	"	"	"
増島 達夫	29	8.29	"	"
内田 信	21	"	"	"
小山田秀明	32	1986.8.17	"	"
長岡 経国	28	"	"	"
後藤 経国	28	1986.8.18	"	"
才藤 哲也	30	"	"	"
野上真佐夫	27	"	"	"
Sandy Allan		1987.8.13	"	"
Evan Price		"	"	"

■ 寸 感 ■

HAJの事務局専従縮小と、岩と雪の休刊が、岳人編集長によって「挫折」と表現された。HAJが本当に「挫折」してしまうのかは、この組織を運営する立場にいる理事、評議員の「当事者」意識にかかっているだろう。

また一般会員の中にも大勢の「当事者」意識を持っている人がいる筈だ。役職の云々を別にして、山の世界の中で特異な存在として活動してきた我がHAJを今後共存続して行きたいと考えている人の積極的な参加を望みたい。

事務局では、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、中国語の翻訳の仕事が山ほど溜っています。ボランティアを募ります。(山森)

事務局日誌(3月)

- 7日(火) 大内理事とミニヤ・コンカ合同追悼会(札幌4月16日)について協議
8日(水) ミニヤ・コンカ登山について北海道新聞社記者来会し取材。

- 9日(木) 1995年登山隊日山協共済加入手続。
11日(土) ヒマラヤ281号発送
17日(金) 5月20日～21日ラサで開催される予定の国際シンポジウムの通知あり。
22日(水) プラブーツ懇談会(山森)
27日(月) 東京集会(13名)
28日(火) ミニヤ・コンカ隊、福沢卓也隊員の葬儀(宗谷郡猿払村、山森・大内)

ヒマラヤ No.282 (5月号)

平成7年4月10日印刷 7年5月1日発行
発行人 稲田定重
編集人 尾形好雄
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遥かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル4階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カー本舗/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004